福島

帰還の春　新入生数が心配

福島県の被災校が置かれている状況は、岩手、宮城両県とは大きく異なります。

東京電力福島第一原子力発電所の事故のため、今なお4万人が県外、4万6千人が県内の各地に避難しています。

学校も現在29小中学校が原発事故で本校舎を使えず、仮設・間借り校舎への移転を余儀なくされたままです。数百人いた児童・生徒がわずかひとケタという学校も少なくありません。

原発の北にある南相馬市の南部、小高区などに出ていた避難指示が今年7月に解除されました。

これに合わせて、区外に避難している4小学校・1中学校が来春、いっしょに戻る予定です。

その一つ、小高中学校（荒木清隆校長）は市内北部の鹿島区にある鹿島小学校の校庭に建つ仮設校舎にいます。

震災前は生徒が400人近かった小高中は、原発から20キロ圏内にあって即時避難となり、鹿島区内で20人ほどで再開しました。いま88人の生徒は仮設・借り上げ住宅などから2系統のスクールバスで通っています。

県大会6連覇もした女子バレーボール部は3人しかいなくて休部状態です。バスケットボール部は試合ができるぎりぎりの5人、サッカー部は10人で「はじめからレッドカード状態」（荒木校長）です。

荒木校長は「小高区への住民の戻りはにぶい」と言います。避難先で生活の場をいったん築くと、地元に帰るのはだんだん難しくなります。小高区への帰還はいま1割ほどとみられます。

いっしょに戻る小高小、金房小、鳩原小、福浦小はともに小高中の校舎に入ります。4校で校長は1人です。

小高中は改修を終えた本校舎の「内覧会」を11月に開く予定で、4小学校の6年生約30人の保護者にも参加を呼びかけています。

「どれくらいの6年生が入学してくれるか、大問題です」と荒木校長は心配顔でした。

CDラジカセも授業で活躍＝鹿島小学校

◇

小高中が校庭を借りている鹿島小は原発から30キロ圏外にあり、一時期は仮設校舎に6校が避難していました。

332人の児童の大半は保護者の車の送り迎えで通学し、朝はたいへんなラッシュになります。歩くことと、外で遊ぶ時間が少なくなり、「体力をどうつけるかが大きな課題です」と星国央校長は話してくれました。

体力、学力の低下は、どこの被災地も抱えている難題です。

小高区と鹿島区の間にある原町区のほとんどは原発の20～30キロ圏にあり、震災当時は屋内退避が求められました。

中心部にある原町第一小学校の校庭には、除染した汚染土などが埋まっています。この辺りの学校はみんなそうです。校舎や校庭の除染作業で出たものです。

学校の再開からしばらく、校庭の利用は3時間以内、運動会は体育館で、屋外プールでの水泳授業には保護者の承諾書が要る、といった状態が続きました。

そのような状況からは脱したとはいえ、悩みは少なくありません。例えば佐藤昌則・原町第一小校長は「体力のためにも歩く集団登校を再開したいが、踏み切れない」と言います。

通学路を含めてすべてが除染されたわけではありません。全国から多くの作業員が入り、大型車も行き交っています。児童の安全確保に自信が持てないのです。

支援品の教材提示装置がたいへん便利＝南相馬市原町区東町の原町第一小学校

児童が遊ぶ校庭には線量計＝南相馬市原町区大太戸の石神第二小学校

「学力、体力も課題ですが、震災から時間が経つにつれ、心のケアが大事になってきています」というのは、福島県小学校長会の髙橋正之・課題担当部長（福島市立清明小学校長）です。

原発事故による避難に伴って学校のクラス数は減っているのですが、発達障害や知的障害の子どもたちをみる特別支援学級が大きく増えているという現実があります。

福島に対する、事実に基づかない風評、認識不足による誤解と偏見…。

「そういうマイナス面にも負けない強い子に育てたい」。佐藤・原町第一小校長は力を込めました。

今年4月からの熊本地震で大きな被害が出ていることを知り、石神第二小や原町第一小などの児童会が自発的に義援金集めを始めました。ほかの被害者を思いやり、自分の痛みとして感ずる。子どもたちが大きく成長しつつあることを先生たちは実感しています。

水俣・福島教育交流
苦難の歴史を中学生が熟議

熊本、福島両県PTA連合会、水俣市PTA連絡協議会が3年前に始めた「水俣・福島教育交流」が7月末、4日間の日程で福島市を中心にありました。中学生72人が参加し、小・中学校の仮設校舎や研修施設、果樹農園を見学し、差別や偏見、風評被害をなくすにはどうすればいいかという課題に取り組みました。

東日本大震災による原発事故によって農産物や観光が大打撃を受けた福島県。その窮状を知り、水俣病による苦難の歴史をもつ熊本県水俣市が申し出て、中学生の相互派遣研修が始まりました。今回が4回目です。

4月の熊本地震の際には福島県のPTA関係者や中学生から心配や激励の電話、手紙が多数、水俣に寄せられたといいます。「支え、支えられる関係」が思いもよらない形で明確になり、結びつきが強まりました。

開講式で、福地憲司・福島県中学校長会長は「苦難を乗り越えた郷土の歴史を伝える時代の証言者に、君たちはならなくてはいけません」と、事業の意義を伝え、励ました。

事前学習で互いの歴史を学んできている中学生たち。8班に分かれると、すぐさま打ち解けた様子です。

2日目の29日には、三春町にある工場の建物で学校を存続させる富岡町の小、中学校と、21日にオープンしたばかりの福島県環境創造センターを見学しました。最新機器をそろえ、「放射線のすべてが分かる」施設です。調査研究、研修、情報発信、交流拠点として期待されています。東京電力福島第一原子力発電所の1、3、4号機が爆発した時の様子や放射線の拡散状況、事故後の福島の歩みを、映像や模型、展示、資料で学びました。

食品にからむ危険（リスクとハザード（危害要因）については、消費者庁の専門家の講義があり、リスクに対する正しい評価と管理が重要であることを学びました。

農産物に含まれる放射線量を計測するモニタリングセンターを見学し、福島市の果樹農園では、県を代表する果物の桃が、原発事故後は出荷できずに収入が途絶えたことや、風評被害に苦しんだ体験を聞きました。

水俣病については、差別や偏見と闘ってきた歴史を踏まえて、市立水俣第一小学校の溝部竜太郎先生が市の環境対策や環境マイスター制度といった市の取り組みを解説しました。水俣病の公式確認から60年がたち、今や水俣市は「日本の環境首都」として、世界に情報を発信しています。

連日、夜は班別討議「熟議」です。見学や講義で感じたこと、考えたことを話し合い、発表内容を検討しました。

「差別、偏見、風評被害を防ぐには」「地元のよい所を知ってもらうために」「正しい情報を発信するには」。班ごとに決めたテーマに沿って、意見を交わしました。

最終日の31日。8班がそれぞれ模造紙に考えをまとめ、7分間の持ち時間で発表しました。

「地元のことをよく知る」「正しい情報を知ることで、自信と誇りをもって伝えることができる」

力強い発表が続きました。PTA役員の一人は「4日間（の引率）は大変だけど、やってよかった、と思える瞬間です」と手ごたえを感じていました。

◇

ベルマーク教育助成財団はこの事業の趣旨に賛同し、前回から50万円の寄付をしています。

1週間前に開館したばかりの福島県環境創造センターで、福島第一原発の模型に見入る中学生たち＝福島県三春町

冷酷な現実告げる看板

南相馬市の被災校を訪ねるにあたり、福島市でレンタカーを借りて飯舘村を経由して向かいました。東電福島第一原発の北西、放射線被害を大きく受けたところです。

道端のあちこちに、除染作業で出た汚染土を入れた黒い袋が積み上げられていました。

避難指示が解かれた南相馬市小高区を夕暮れ時に回ると、明かりのともる家はほんのわずかでした。

その小高区から南に行ってみました。仙台からここを経て茨城、東京へつながる幹線の国道6号です。震災後しばらく経って、車は通れるようになりました。

浪江町、双葉町、大熊町……。第一原発から数キロしか離れておらず、原発の建屋も一部見えます。沿道の家やレストランのガラスが割れたり草木が生い茂ったりして、荒れ果てています。

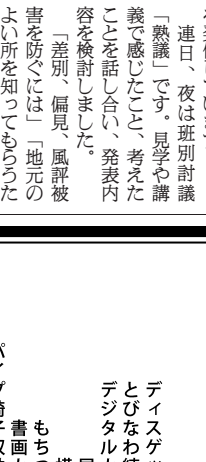
住民が戻れる時期のメドさえ示すことができない「帰還困難区域」を広く抱えています。復興しようにも、出発点さえ見えない。厳しい現実の連鎖を改めて思いました。

国道6号に立つ看板＝福島県大熊町

現地に学ぶ必要なこと

熊本地震の被災校を訪問した際に、熊本城を訪ねました。

石垣の隅の一列の石だけで立っている戌亥櫓（いぬいやぐら）を見ました。戌亥は北西の意味で、城内の名前のとおりの位置にあります。部分公開されている城の敷地内を歩いて、堀の対岸に行けます。大地震直後には別の大きな櫓の一本足がテレビで放送されました。そちらは鉄骨で補強工事がされたそうです。戌亥櫓は小ぶりな造りですが、それでも多くの観光客や見学にきた小学生たちが見ていました。私も感激したひとりです。



櫓の写真を撮ってフェイスブックで「頑張れ熊本城」と紹介しました。何人かが「いいね」を送ってくれましたが、地元の友人は「城よりも、住民の方が、大事だろが!!」とコメントを書きました。

そうだね、と思いました。

熊本の人たち頑張れ、という気持ちを、直接そう書くのも気恥ずかしく、お城にこと寄せたのですが、熊本の人たちの苦労は続いています。友人も自宅の損害が「半壊」か「全壊」かの認定をめぐって市役所に通う日々です。

「半壊」なら半分住める訳でもないのですが、認定によって行政からの支援に大きく差があるためです。同じ話を何人もから聞きました。

4月の大地震から半年。政府がまとめた記録を読むと、当時、2度の震度7（激震）をふくめ震度6（烈震）以上の揺れが、わずか1日半の間に合計7回も襲ったのですね。物的な被害もさることながら、その恐ろしさはどれほどだったでしょう。

全国から救援物資が届きました。復旧は少しずつ進み、必要なものは日々変わっていきます。教育関係者の話では、ランドセルが大量に送られてきたそうですが、役立ったのは数個で、残る善意の品の保管が大変だそうです。

ベルマークからの支援は、現地の学校に、その時必要なものを選んでもらいます。企業やPTAの皆さんからお預かりした支援金が活かされるように、被災地の学校の皆さんと連絡をとりあいます。この方法は東北被災地の学校から学びました。東北と九州、東西の被災地の皆さんに学びながら、ベルマークの活動を続けてゆきます。

（ベルマーク教育助成財団　常務理事・中島泰）

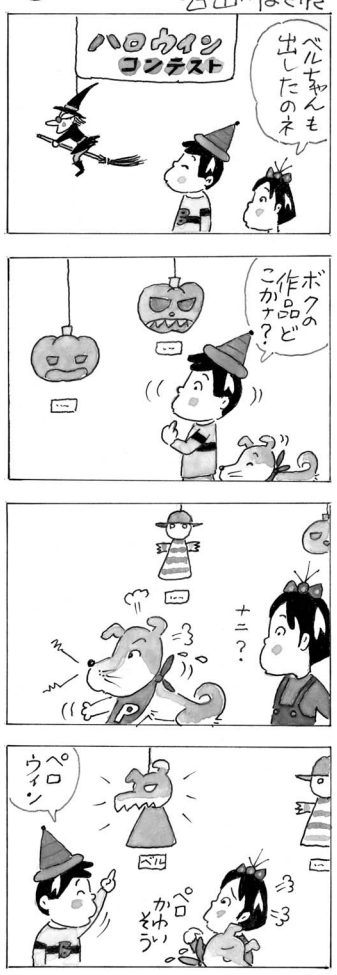
小学校3年生が父親と財団見学

東京都北区立東十条小学校3年生の星野悠稀君が父親の哲也さんと8月17日ベルマーク財団を見学しました。数カ月前からベルマークに興味を持ち、協賛会社や昔のマーク画像を調べていたそうです。哲也さんが財団のホームページで見学できる事を知り、夏休みの自由研究に向けて、話を聞きに来ました。

まず運動の仕組みをまとめたDVDを見て、事務所見学に入りました。全国から届くベルマーク荷物が天井近くまで積まれた倉庫や、マーク付商品が並んだ棚には驚いた様子で、写真に収めていました。検収作業を見ながら「脱退した会社のマークも送られてきますか？」と、質問もしました。

東十条小学校は、ベルマーク運動初期の1966年から参加しています。悠稀君は「脱退した会社や昔のマーク、お店であまり見かけないマークがいっぱい見られて楽しかった」と話しました。

ベルちゃん
喜田川まさゆき



ベル預金で学校設備を買いましょう

5万円前後
ディスゲーター
とびなわ練習台
デジタルカメラ
展示板
横断幕
もちつき機
書画カメラ
パイプ椅子収納台車
教材提示装置
応援旗
空気清浄機
BDレコーダー
キンボール

4万円前後
マーチングドラム
高圧洗浄機
石油ファンヒーター
身長計
ファクシミリ
平均台
ホームベンチ
SD・CDシステムコンポ
ワイヤレスマイク
踏み切り板
キーボード
炊飯器
液晶テレビ
プリンター
横断幕
空気清浄機
全自動洗濯機
強力パンチ
顕微鏡
電子レンジ
ジャンボボール
竹馬整理台

3万円前後
SD・CDシステムコンポ
ゲームカウンター
工場扇
車いす
ミシン
ベンチ
体操マット
デジタルカメラ
ボール入れかご
傘立て
綱引ロープ巻取器
店舗用クリーナー
竹馬整理台
アクアリウム
一輪車収納スタンド
赤白玉入台
芝刈機
複製画
大玉
デジタルカメラ
オーブンレンジ
加湿器

40～100万円前後
トランポリン
アップライトピアノ
グランドピアノ
マリンバ
拡大機
講演台
校旗
AED
コピー機
プラズマテレビ
アウトドアクロック
エレクトーン
高速印刷機

30万円前後
コンサートシロフォン
シュレッダー
アルトサクソフォン
電動裁断機
電子ピアノ
紙折機
和太鼓
赤外線暖房機
大判プリンタ
アウトドアクロック
プログラムタイマー付時計
液晶プロジェクター
百葉箱
クラリネット
書架

20万円前後
ハイビジョンテレビ
ジェットヒーター
舞台用照明器具
屋外用壁掛時計
学校用オルガン
サッカーゴール
ドラムセット
肋木クライミングウオール
屋外掲示板
書画カメラ
和太鼓
朝礼台
冷蔵庫
パソコン
優勝旗
展示ケース
エレクトーン
学校用シンセサイザー
スクールキャビネット
飼育小屋
カラーレーザープリンター

11～15万円前後
立奏木琴
ウオータークーラー
マルチひな段
学校用オルガン
ポップコーン機
移動式救助工具セット
学校用キーボード
集会用テント
赤外線ヒーター
卓球台
パソコン
自動紙折機
ワイヤレスアンプ
液晶テレビ
車いす
展示板
冷蔵庫
裁断機
スクリーン
プロジェクター
デジタルビデオカメラ
フットライト
電動アイススライサー